

広島原爆資料館と吉田松陰

園長 児嶋 草次郎

新しい年度、令和6年度を迎えています。私たちは4月1日、広島原爆ドームのある平和記念公園を訪れました。満開のソメイヨシノ桜が迎えてくれました。あのドームの周りには、大勢の観光客がいて、そのほとんどが髪の色、肌の色様々な外国人たちでした。チューリップの花も流れる川面も、一人ひとりの肌も、周りの建物群とも調和して、太陽とともに光り輝いていました。いくつの国の人々が集まって来ているのか分かりませんが、あの周りはグローバリズムの一つの大きな花が咲いて、世界平和が実現しているかのようにも見えました。その花芯には、原爆によってこっぴみじんに吹き飛んだ当時の街の一つの残骸が孤独に建ってはいるのですが一。

今年も高校生たち（9名）と一緒に研修旅行に行くことができました。3月31日に園を貸切バスで出発し、山口県萩の「松下村塾」を訪れ、2日目にこの”原爆の地”に下り立ちました。中学校や高校の修学旅行で訪れなくなったということで、職員からの提案で今回コースに入れたのです。私はこの公園を散策したことは何度かありますが、資料館の中に入ったことは若い時に一度しかありません。あまりにむごく、マイナスの感情が湧きあがって来て、怒りが体に充満して来るからです。私はその後、この感情から逃げているのですが、子供たちも一生に一度は向き合うべき、日本の負の遺産なのでしょう。

街中で昼食を取った後、私たちは、「広島平和記念資料館」に入りました。まるで、モネかピカソの絵でも見るかのような人の多さです。日本人より外国人のほうが多いのですが、中には、ハンカチで涙をぬぐっている外国人の女性もいます。昭和20年8月6日8時15分、一瞬にしてこの原爆は広島を焼きつくし、14万人の何の罪もない人々を焼き殺しました。その後も放射能を浴びた何万人もの人々が後遺症に苦しみ亡くなっています。その後8月9日には長崎にも原爆が落され、後遺症も含めて7万人の人々が殺されています。

私は子供たちから離れ、外国人たちの間でもまれながら、せつかく治りかけた傷のカサブタでもはがされるような気分で、見て回りました。この集団殺戮（さつりく）の責任は、今だにだれも背負おうともしないのです。色んなマイナスの感情が蘇り、資料館を出ると、しばらく茫然としていました。

このような体験をしたわが国が、13年前福島県で原発事故をおこしています。つい最近のテレビNHKスペシャル「廃炉への道2024」を観た後も、茫然としてしまいました。原子力発電所を作る時は、偉い人たちは、「絶対安全です」と胸を張ったはずですが、ところがあんなことになってしまいました。アメリカのスリーマイル島の原発事故が一基だけのメルトダウンであったのに比べ、日本は三基でその損傷も激しく、世界最大級の事故なのだそうです。私が恐ろしいと思ったのは、10年で溶解した炉心を取り出す予定であったのに、13年たった現在も、まだ手つかずの状態だということ。色んな建物の構造物とまざり合った約880トンの核燃料デブリが、あの崩壊した建物の地下に潜んでいて放射能を発散し続けているのです。これらを取り出さない限り残骸は片付けられないし、それが終らない限り、あの周辺に住んでいた人々は帰れないのです。もしかしたら、半永久的に帰れないのかもしれない。

日本が太平洋戦争に負けたのは昭和20年で、私が生まれたのが昭和24年です。日本は焼け野ヶ原か

らたくましく立ちあがりました。敗戦からは13年後は東京でアジア競技大会が開催され、19年後には東京オリンピックが開催されているのです。原発の事故から13年たっても手がつけられず、その電気を供給していた東京はそれとは無関係にますます発展して巨大化していくというのも、何かおかしいのではないか。おそらくいるいと焼死体が並んでいたであろう土地の上にたたくみながら、そんな思いをめぐらせました。

ロシア・ウクライナ戦争は継続中で、プーチンは、核兵器の使用をちらつかせています。北朝鮮も傍若無人にその開発を進めています。宇宙からみれば限られた小さな一つの地球環境の中で、何度戦争をすれば気がすむのか。人間とはなんと愚かな動物なのだろうと思います。歴史が繰返され、地球が減びることにならないように切に願います。

さて、話を「高校生自覚旅行」にもどします。今年の主な目的は吉田松陰の志について学ぶことです。

3月31日(日)、朝4時46分、貸切バスで友愛社を出発。2月の中学生も交えての一泊旅行の時と同じように、出発してすぐ、より主体的に参加するために次のように話しておきました。

石井十次が生まれたのは、1865年。吉田松陰が生まれたのは、1830年で、石井十次のお父さんの世代の人。先日、みんなは大分県日田の咸宜園に行って学んで来たけど、今度は、山口県萩市にある松下村塾跡で吉田松陰について学びます。咸宜園と松下村塾とは対照的。咸宜園には全国から大勢の若者たちが集まって来て、寮で寝食を共にしながら学びました。90年位続いています。松下村塾はもともとおじさん(玉木文之進)がやっていた私塾で、咸宜園が多い時に200人くらいいたのに比べ、松下村塾はせいぜい30人ほど。その期間も、松陰はせいぜい1年1か月くらいしか教えていない。

この二つの私塾で何が一番違うかということ、その時代状況だと思う。今ロシアがウクライナに侵略しているけど、当時、イギリス、フランス、アメリカ等も同じようなことをやっていた。アジアの国々に次々侵略し、植民地にしていった。日本も、植民地になる可能性は充分にあった。松陰はそのことをすごく心配して、なんとかしなければならなかった。30歳ほどで亡くなったので、その志を実現することはできなかったけど、弟子たちが引き継ぎ、日本は生まれ変わって、今のような平和な日本になった。今、みんなはのほほんと生活できている。時代状況は当時と似て来ているのかもしれない。ロシア・ウクライナ戦争は終るきざしが見えないし、中国も台湾をねらっている。北朝鮮の動きも不気味だ。今回吉田松陰に見習わなければならないのは、その志である。

志の大切さについては、常に子供たちに話していることです。論語の「遠き慮(おもんばかり)りなければ、必らず近き憂い有り」が示しているように、将来への目標や夢、つまり志がないと、思春期の時代は、どうしても目の前の誘惑やその時々感情に流されてしまい、憂える結果になってしまいがちです。園生活を自分の運命を変えるチャンスとしてとらえ、世のため人のためというような高い志を抱いて、積極的に生活する少年になってほしいのです。

松陰は残念ながら30歳そこそこでこの世を去ることになりましたが、その弟子たちがその志を具現化していったのです。この旅での出会いが子供たちの心の琴線に触れ、魂が覚醒してくれることを願っています。

「草莽崛起(そうもうくつき)」という言葉は松陰は唱えます。こんな田舎から高杉晋作、伊藤博文、山県有朋等、明治革命をなすとげた志士たちを何人も搬出したことは驚くべき奇跡です。似たような時代状況の時だからこそ、友愛園の子供たちの中から、日本の未来を切り開くような人材を出してほしいと夢想しています。

9時11分頃、関門橋を小型バスは疾走し、本州に入りました。渦巻く海峡の遠くは霧が薄くかかったようにくすんでいます。黄砂かもしれません。関門自動車道を登り、美祢(みね)東で下りたのは10時

13分頃でした。萩市内で昼食を取り、お昼頃に松陰神社に到着。神社の前で子供たちに質問します。「この神社と松下村塾とはどっちが早く建ったのだろうか？」。

子供たちは皆初めての訪問ですので、見た風景にまどわされてしまう子もいます。考えてみればあたり前のことですが、神社は明治40年に松陰を師と仰ぐ人たちによって創立されたものだそうです。松下村塾は当時のままですが、周辺は豊かな農村地帯であったはずですが、松陰は学ぶだけではなくて、塾生たちと労作をすることも理想としました。

持参した以前買った文庫本「吉田松陰」(徳永真一郎著)には次のように書いてありました。

「<杉家の邸内には畑が多く、春夏のころ、先生は外に出て草を取られた。門人もこれを手伝ったが、先生は草を除きつつ読書の方法や歴史の話をしてくださった。門人はみな、これを楽しみにしたものである>」(門下生の思い出)。

「塾生と寝食を共にする、今日の全寮主義を理想した。

ほんとうの教育は、寝食を共にしながら教えるものの人格に一つの感動として受け取られなければ効果はない、知識の相伝だけでは、ほんとうの教育でないという考え方からきていた。」

できればそういう労作教育の原点・雰囲気は残してほしいのですが、神社経営が優先されていていってしまうように感じます。ソメイヨシノはまだ咲き始めたところでした。

現代では小屋といつてよいくらいのわずか8畳ほどの教室の前で当時をイメージし、「親思うこころのまさる親ごころ けふの音づれ何ときくらい」の石碑の前で立ち止まり、神社をお参りし、最後に改修工事の終わった「吉田松陰歴史館」に入りました。

この松下村塾をただの見せ物にするだけではなく、隣りに模造の部屋でも作って、その畳の上でみんなで論語の素読でもしたら、教育的効果は2倍3倍になるだろうに、そんな思いを抱きながら、その後私たちは、吉田松陰墓所、藩校明倫館跡、萩城跡と巡りました。

私は3年に一度は高校生たちと一緒に訪れていますので、馴れてしまって特別の感慨は湧かないのですが、初めて訪れた子供たちの感性は新鮮ですので、帰って書いた感想文につきのような文を残してくれました。

「託すという事は、日本を変えたいという強い志があるからこそできた事だと思います。吉田松陰は『国家とともにという志がないならば人ではないものとする』という言葉を残していて、まさにこの言葉を行動で示したのが塾生である伊藤博文などで、日本を変えたという事実だと感じました。」

高1 しずく

「吉田松陰は日本の将来のために、自分の思想を貫き続けました。29歳で亡くなってしまったけれど、志を強く持ち、それが弟子たちに影響を与え、日本の歴史を変えました。志を強く持っていなければ、社会に出た時に、すぐに流されてしまい、夢の実現どころか、大学に進学してもすぐに退学したりしてしまいます。志を強く持つことで、目標を明確にし、頑張ることができるので、意識したいです。」

高3 ねね

そして、予定より1時間早く4時頃には市内寺町通りの民宿に入りました。前回に泊った民宿は閉じられていて、町を歩いていても衰退は感じたことですが、やはりコロナの影響を受けたのだろうと思います。夕食までに時間があつたので、私はすぐに散策してみました。古い寺が集まる門前町で、今建設中の高鍋町「友愛の森」事業に城下町として取り入れるべき何かヒントはないものか、そんな思いで探索しました。残念ながら収穫はありませんでしたが、一人で色んな事を考えることはできました。

次の日広島へ寄り、下関にユースホテルに泊り、4月2日に無事に帰って来ることができました。色んなことを考えさせられた3日間でした。

今、4月8日、あわててこの文章を書いています。新聞はイスラエルとイスラム主義ハマスの戦争が半年になったと報じています。ロシア・ウクライナ戦争もそうですが、こちらの戦争も多くの死者（33,000人超）を生み出し、孤児だけでも17,000人にのぼるとか。「ジェノサイド」とか「壊滅的飢餓」というような言葉も記事の中に見られます。日が止まったのはイスラエルとハマスの両指導者「両指導者終着描けず」（読売新聞4月8日付）という言葉を見つけた時です。

吉田松陰の志を引き継いだ地方の田舎者たちが中心になって、明治と言う風を作りました。昭和に入り、また戦争を引きおこした国のリーダーたちは、「終着を描けない」ままに、原爆を被ってしまったとも言えます。歴史は、100年200年とたたないと客観的に評価できないものなのかもしれませんが、日本の「防衛力強化」をマスコミが叫ぶようになった今こそ、国のリーダーたちの資質が問われるのではないかと思います。

核戦争が起きれば、流星激突後の恐竜絶滅時と同じように、黒い雲が地球を被ってしまい、太陽の光が地上に届かなくなって、地表は凍り付いて人類は滅亡するとか。子供たちには、田舎人であることを誇りにして、大志を抱いて生きてほしいと願います。